



高齢者の食の支援には、もつと多くのボランティアの参加が必要

平野真佐子

(全国老人給食協力会代表)

全国老人給食協力会の代表である平野真佐子は、平成15年12月18日小細胞ガンのため永眠いたしました。享年62歳でした。謹んで故人へのご厚情を深謝いたします。

故代表は、生前関係各方面のみなさまのご協力のもと、食事サービス活動の実践活動のみならず全国各地での講演やシンポジウム、ボランティア活動についての訪問・研修・体験学習・取材等を受け入れながら、様々な媒体にて住民参加による食事サービス活動の重要性を訴えてきました。

今回ご紹介するのは、昨年の夏にお受けしました雑誌のインタビュー記事です。故人の食事サービス活動への思いを感じ取っていただければと思います、掲載させていただきました。

全国老人給食協力はこれまで通り各地の活動団体とのネットワーク組織として機能していきまますので、みなさまどうぞよろしく願いたします。

本文及び6～8ページの写真は「食生活」2003年8月号（フットワーク出版株式会社）より転載させていただきました。

私が現在代表を務めさせていただいている全国老人給食協力会というのは、全国の食事サービス活動をするボランティア団体の連帯組織なんです。日本各地に住民主体で高齢者への配食・会食サービスを行なっているボランティア団体があり、私も老人給食協力会「ふきのとう」という、東京都世田谷区で活動していた団体の代表でした。

「ふきのとう」は、20年前の1983年に11人の仲間とともに立ち上げたもので、その当時は世田谷区の桜丘周辺の地域を対象に活動する小さな団体でしたが、現在は540名ほどのボランティアの方々とともに、世田谷区のほぼ全域で活動しています。

私たち「ふきのとう」メンバーは、最初はわからないこ

とだらけでしたから、きちんと活動を行なうためにはどうすればよいか、いろいろと勉強も行なってきました。85年に開催した日本で初の老人給食をテーマとした国際シンポジウム「日豪シンポジウム」では、全国各地の団体に参加していただきました。

そのなかで、オーストラリアから招いた団体（ミールズ・



オン・ホイールズ・サウスオーストラリア、MOW・SA協会）の会長から、各団体が連帯するための全国組織が必要であるという主旨のアピールがあり、多くの団体から賛同の声が上がったんですよ。これをきっかけに翌年全国老人給食協力会が発足し、セミナーを開催したり、会報を発行したりしながら、運営に役立つ情報やノウハウなどの共有や、サービスの向上、行政や企業、一般の方などに向けてのアピール、提言などに努めています。

たとえば、私たちは9月の第1水曜日を「世界老人給食の日」に制定しています。これはMOW・SA協会の提案で、日本を含む世界7カ国ほどが参加しているものなんですけど、その日はいくつかの

統一された高齢者向けの料理とかデザートをつくって、一般の人もお迎えしての記念の食事を行ったり、イベントを開催したりといったことを通して、私たちの活動を多くの方に理解してもらおうよう、外に向けたアピールを行なっています。

子どものための活動を機に、高齢者問題を知る

元々は私、ただの専業主婦なんです。結婚後は子育ての傍ら、子ども会などのボランティアに参加していました。生まれ育った東京都新宿区から大阪、福岡へと引っ越し、次に引っ越した世田谷でも最初、子ども会活動が中心でした。ところが、ある活動がきっかけで、地域の高齢者の方々

どのつながりができて、そこから高齢者向け食事サービスの必要性を痛感し、「ふきのとう」を始めることになったんです。それは、土地の面がそのまま残されていて、子どもたちの格好の遊び場でもあった大きな広場に建つこととなった区民センターに、少しでも土のある広場が残るよう、計画を修正してもらおうという活動でした。

地域住民に署名を求めているなかで、高齢者の方々から関東大震災や空襲のとき、広場の存在がいかに人命救済に役立つたかを聞かされたのですが、この話がその後の活動に非常に役立つ、区議会に建設計画を修正してもらおうことができました。

このとき、この地域における高齢者が直面している問題を知りました。代々ここに住んでいた方はともかく、引越してきた方は、地域での人間関係が希薄なことも多いんです。また、昔、新築の団地に入居し

た人々は、ほぼ同じ世代の人が一斉に入居するため、同じように歳をとるので、団地が高齢者ばかりになってしまいうという問題が起こっていたんですね。

エレベーターのない団地のいちばん上の階に高齢者が住んでいることもよくあります。彼らの子どもたちは大人になるとそこを巣立ち、団地には高齢となった親だけが残ってしまうそうです。「団地に入った当時は、

自分たちも若かった」という話を聞いたとき、これは彼らだけの問題じゃない、自分たちの問題として捉えるべきだ、と思いましたね。そして、すでにボラン



ティアとして一人暮らしの高齢者のケアをしていた仲間から、一人ぼっちの食事をいかに高齢者が寂しがっているかを聞き、だったらまず、そういった方々が一緒に集まって食事ができる、会食形式の給食活動をしようじゃないの、というところから、「ふきのとう」は始まりました。

そんな意気込みで始めた食事サービスですが、私はいえ、料理担当のほうをす

ぐにクビになってしまいました（笑）、5人の子どもたちのために、専業主婦として手を抜かずやっていたつもりなんです……。資金を調達しなさい」「ガス釜を準備しなさい」「配達ボランティアを見て」……。代表というのは、つまり、そういう役に回される者のことをいうようです（笑）。

子どもたちに授業の一環でボランティアを行なう機会を

こういった食事サービスのボランティア活動っていうと、その担い手は圧倒的に女性で、中年か若者という風に固定されがちなんですけど、それではいけないと思うんです。性別、世代、技能なんて関係な

く、いろんな方々に参加していただきたい。人手が足りないからじやなく、高齢者の抱える問題は、将来の自分たちの問題なんですから、みんなで取り組んでいきたいんです。食関係だけでなく、たとえば生け花の先生とか、異分野の方の参加もありがたいです。



全国食事サービス活動セミナー交流会
(2003年7月)での様子

「ふきのとう」では5年ほど前から、男性料理教室をコミュニティセンターの協力で開催してゐるんですけど、そしたら、料理づくりを覚えるだけじゃなく、その一部の方がうちの活動に参加して

ださるようになりましたね。それと、86年にMOW・S A協会の活動現場を視察したとき、高校生が授業の一環として厨房で料理をつくっていました。ボランティア活動は義務じゃないんだから授業でやっても、と思う方もいらっしやるでしょうが、子どものとき少しでも経験していれば、「あ、昔やった」って、大人になってから参加してくれるかもしれないじゃないですか。

以前、日本にはボランティアの授業がなくて残念でしたが、最近、取り組み始める学校が少しずつ増えており、うれしい限りです。

住民ボランティアが高齢者の食事を支援していくためにはどうすればいいか、全国の現場の声を集め、海外からも学んできましたが、わからないことはまだまだあります。

ですから、これからも私たちの活動をもっと多くの人に知ってもらい、多くの皆さんとともにこの問題を解決していきたいら、と思えます(終わり)。

写真：1999年9月全豪MOW会議レセプションでのスナップ。

